

どっこい生きてます!



潮騒JTCは8月中旬に行方市のレイクエコーで、潮騒初の夏祭り「入寮者交流会」を開きました。潮騒を構成する各部門や関連団体のメンバーらが順番に工夫を凝らした手作りのステージパフォーマンスを披露し、仲間達から熱い声援や拍手が送られていました。外からは他愛のないイベントに見えますが、アディクト(依存症者)が薬物やアルコール、ギャンブルに頼らないで、自分達が企画・運営する手作りイベントを楽しむことには大きな意味があります。(4-5 ページに記事)

2017

8

「情けは人の為ならず」を 本来の趣旨で実践



夏も終わりを感ぜさせる季節となりました。振り返ると今夏は7月の猛暑から一転、8月には梅雨に逆戻りしたような記録的な天候不順が続きました。皆様、体調など崩していませんか。夏の疲れがどっと出てくる時期だけに、どうかご自愛ください。私個人はあと半年ほどで後期高齢者の仲間入りです。以前よりも健康管理には気を遣うようになりましたが、相変わらず施設運営に奮闘しています。肉体的にも精神的にも衰えを自覚させられる場面が多くなっているのです、少しでも時間があれば体を休める工夫をしています、なかなか思うに任せません。自分自身に対して徐々にブレーキを掛けるようにはなっていますが、生来がむしゃらに突っ走るタイプなので、周囲の助言には耳を傾けながらも「行くところまで行くしかない」「最後は歩きながら倒れて人生を閉じたいものだ」と勝手な妄想を描いています。施設の代表者だけに広域的に動く事が求められるのですが、さすがに車の運転は手の空いているスタッフに頼るようになりました。

さて、施設の高齢化もあって7月下旬から8月初めに掛けて潮騒を終の棲家とする仲間3人が亡くなり、これも私には痛手となりました。「なぜこうも私より若い人達が逝くのだろう…」「もう少し早く潮騒に繋がっていたなら…」「もはや既存の回復プログラムでは重症者を救えないのだろうか…」など後悔の念が消えません。でも、私たちアディクトの生き方の基本は「今日一日」です。仲間の死は悲しいですが、忌み嫌う否定的な感情ではとらえられません。生前、周囲に数限りないトラブルや迷惑を掛け続けたとはいえ、一足先に旅立った彼らの魂は私を含め潮騒の仲間達に「霊的な目覚め」を促し、より高次のものとなってリレーされていきます。世間の常識からすれば、ヤク中やアル中、ギャンブル中毒者の死なんて歯牙にも掛けないでしょうが、みんな掛け替えのない仲間です。難産な回復の人生だったとしても、それぞれに生きてきた証しがあります。私にとって仲間の死はすべからず尊く重いものであり、決して無駄死にではないのです。肉体は滅んでも、彼らの魂はやっと「愛と許し」の平安な世界に到達できたと信じます。

よく皆さんから「民間の貧しい福祉施設がなぜそこまで頑張るのか？」と聞かれますが、私は「情けは人の為ならず」のことわざを、その本来の趣旨に沿って実践しているにすぎないのです。世間ではこの教えを「情けを掛けるのは、その人の為にはならない」と否定的に考えていますが、正しくは「人に情けを掛ければ、巡り巡って自分にも良い報いとなって返ってくる。人に対しては情けを掛けて親切にするものなんだよ」という教えです。つまり仲間を弔うことは、私にとって自分自身の回復のためなのです。他人によく見られようとか自己満足的な儀礼ではなくて、私は息の長いビジョンで潮騒の運営をしているつもりです。綺麗ごとすぎるでしょうか？どうか読者の皆さん、忌憚のないご批判やご意見をお寄せください。



ロイ・アッセンハイマー神父の納骨式に寄せて

日本ダルク代表の近藤恒夫さんを回復に導き、初期のダルクを経済的にも支え続けたカトリック米国メリノール宣教会のロイ・アッセンハイマー神父が亡くなって12年、故ロイ神父の追悼ミサと納骨式が8月11日、東京・文京区のカトリック東京カテドラル関口教会で荘厳な雰囲気の下に執り行われました。慣れない日本での布教活動から自身もアルコール依存症となり苦しんだ経歴のあるロイ神父でしたが、近藤さんの盟友であることはもちろん、難産だった我が国の依存症回復支援活動に深い理解を示し、一貫して下支えしてくれました。式には潮騒ジョブからも10数人が参列し、改めてロイ神父の偉業を振り返りました。以下は、参加したアルコール依存症のトムさんの感想です。



ロイ神父は、日本の中間施設の元祖である大宮のハウスでプログラムを行っていた仲間の一人と聞いています。そこには日本のAA・NAの産みの親と言われる人たちがいました。ロイ神父もその中の一人です。当日は、式が始まると入場してくる神父様の中に近藤さんの姿が見えました。なぜと思いましたが、式が進むにつれてミサ自体から伝わってくるロイ神父への思いがそうさせたのだと思いました。ロイ神父に関しては書籍もありますが、仲間が大好きでいつもハーレーを乗り回し、出かけようとしたときに雨が降ってきたら「くそつたれ、でも感謝します」と言ったりしたこと。そしていつも仲間に寄り添っていたの

が想像できます。

式の中で清めの儀式がありました。仲間とともに参加させていただきました。最近の私は自身の高慢さに、嫌気と恐れを感じていました。仲間にもそのことを話した翌日、このプログラムをいただきました。きっと病に負けずに前を向いて歩けよ、とのメッセージだと思っています。このプログラムは第3ステップの決心をすると、奇跡的なことが起きると言われます。これから周りの仲間にも奇跡が起きるように…。(トム)

【ロイ・アッセンハイマー神父】

メリノール宣教会司祭。1938年アメリカ合衆国ペンシルベニア州生まれ。1965年来日。布教活動を行う傍ら、1975年札幌市と帯広市でアルコール依存症者の回復施設「メリノール・アルコール・センター(MAC)」を開設。1985年にダルク開設を支援。近藤恒夫氏とともに薬物依存症者の回復支援に尽力した。2000年アパリ初代理事長に就任。2005年脳出血で死去した。享年65歳。

【メリノール宣教会】

1911年に創設されたカトリック教のアメリカの海外宣教会。ニューヨークに本部をもつ。日本ではアルコール依存症者の回復施設のほかに、山谷で暮らす貧しい人々を支援する山友会を結成するなどの弱者救済の活動を行っている。



多彩な出し物で入寮者が真夏の半日を楽しむ

潮騒ジョブトレーニングセンターは8月18日午後、北浦を望む行方市宇崎のレイクエコーで、潮騒独自の夏祭りイベント「入寮者交流会」を開き、入寮者が自分達の手作りパフォーマンスを通して夏の半日を楽しみました。これまで潮騒では、夏場に施設内ミニフォーラムに取り組んできましたが、今回初めて男女混合による入寮者交流会を実施しました。昨年盛り上がったクリスマス感謝祭などで、スタッフが自信を深めてきたことが下地になりました。今回は150人を超える規模にふさわしい会場確保に苦労しましたが、何よりもスタッフを中心に各部門がよくまとまり、「自分達が楽しめる」イベントを実現しました。

交流会は午後1時過ぎから始まり、オープニングでは最初に各部門・団体の責任者らから簡単な活動紹介に始まり、栗原センター長があいさつ。引き続き、最近入寮したニューカマー（新参）メンバーや職員さんらの自己紹介があり、各部門の発表に移りました。トップを切ってまとまりのある農業・作業隊が、なまめかしい女装メンバーを加えたステージパフォーマンスを披露、久し振りに戻ってきたカンさんのギターテクニックが女性陣からの黄色い声援を受けて会場を盛り上げていました。

続いてデイケアと下津ナイトケア・メンバーが壇上に上がり、締めくくりには東日本大震災の復興応援ソング「花は咲く」の合唱を通して、メンバーのまとまりを感じさせました。この後、ステージパフォーマンスで定評のある百寿亭のスタッフ有志の皆さんが、格の違いを見せつけるダンスステージを展開しました。続いて女性ハウス「るみの家」メンバーが登場、「女を捨てる」覚悟

のへそ出しルックなどで会場の盛り上がりは最高潮に達しました。最後は中ナイトケア施設のメンバーが奇抜な衣装で登場し、なかでもノリノリの舞台を演出したボーカルのブーちゃんの力量には目を見張るものがありました。

今回の企画は潮騒初の取り組みでしたが、忙しい日常業務の中で潮騒を構成する各部門や関連団体が事前練習に取り組んだ成果が如何なく発揮されました。栗原センター長は最後の全体講評で「みんな笑いあり、サプライズありの素晴らしい、思い思いの楽しいステージを実現してくれた。マンパワーあふれる潮騒の底力を見せ付けられた思いがします。これを機に、また明日からは地道な回復に取り組もう！」と労をねぎらいました。



農業隊での出し物では 今回初めて歌を歌うことに

ギャンブル依存症の、のぼるです。レイクエコーでの潮騒夏祭り交流会。自分はこの施設イベントの前に8/5～8/14まで、実は東京の方に“家出”出張中（その意味分かりますよね！）でした。なので、本当なら18日のこのイベントが終わってから施設に復帰したかったのですが、人生そううまくはいきません。当日は、ビシッとスーツでキメて舞台に立ち、マイクを握ることになりました。初めは緊張しましたが、でも紹介などで自分の出番前に何回もステージに上がられ、次第に程よい緊張のなかで自分の持ち味を出すことが出来たかな、と思います。またの機会にお会いできればと思います。でも、（小声でしか言えないが）本音をいうと二度とやりたくないんだな、これが…。



工夫を凝らした演出の出し物が 大変面白かった

潮騒JTCに漂着して、はや4カ月半となりました。この間、春の潮騒大運動会、ゴールデンウィークのうどん作り、そして今回3回目となったのが、夏祭り交流会イベントです。潮騒JTCは年間を通して、施設の主役である入寮者が楽しく参加できるように工夫を凝らした各種イベントが組まれますが、それを支える裏方の苦労には頭が下がります。今回も、潮騒を構成する各部門のメンバーらが、いずれも工夫を凝らした演出がうかがえる出し物をステージでめいっぱい展開してくれて、大変面白かったです。うち(デイケア部門)は司会を務めたリーダーのツカさん、こばさん、ウッチャン、鉄ちゃんで漫談をし、最後は下津ナイトケアの仲間達と一緒に歌って終わりました、自分としては大変うれしく思っております。みんな忙しい中で、それなりに頑張りました。次回は、もっと楽しくやりたいと思います。



「るみの家は最高」 「自分の居場所だな」と感じた

まだ入寮したばかりの私を、夏祭りの舞台に仲間達と共に出演して頂いたことがすごく嬉しかったです。勝手かもしれませんが、仲間達が受け入れてくれたんだ、心の中で喜びました。出来具合は別にしてネ(笑)。また、他の出演者の方々を見て笑えたこともよかったです。潮騒では、こんなにいろんな人達が夏祭り企画に携わっているんだということを思い知りました。おかげで自分の殻も少し割れました。今後どうしていくかを考えられる気持ちにさせてくれました。「るみの家は最高だな」「ここは自分の居場所だな」と感じました。体を動かすと心が強くなれる気がします。仲間達に支えてもらいながら、いろいろなことに挑戦していきたいです。とても楽しい一日を過ごさせて頂きました。ありがとうございました。欠点や短所の多い私ですが、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。



ここで頑張れたなら何かが変われる！ との思いでやり終えた

私の病気はパニック障害と、他にもいくつかあります。私は人前で話したり、大勢の中においてシラフで何かをすることは施設に来て、初めての経験でした。仲間達に心のケアをしてもらいながら、練習して夏祭り当日を迎えました。朝から緊張してドキドキしながら、出番を待ちました。他のグループの演技を見ていざ本番となりました。緊張はずっとしていたけど、絶対やってみせる、ここで頑張れたな

ら、何かが変われる。そんな思いで、必死にやり終えました。仲間にも感謝、施設長のルミさんにも感謝です。今回、初めて自分を褒めることができました。ここで頑張れたことを生かして、回復を続けます。いつか子供達と会える日を信じ、恥ずかしくない母でいたいな、って思いました。



みんなの心が解放されて 楽しい時間を過ごせた

潮騒の夏祭り、久しぶりに舞台上に上がれて、私にはとても心地よいものでした。ステージで体を動かすこと、踊ることは小さい頃からしていたので、その名残なのか、心の中はわくわくして喜ばしい気持ちになっている私がいきました。この日のために、仲間みんな8月に入ってから朝9時になると練習をしていました。だから、それをお披露目する日には、みんなの気持ちがぎゅっと団結されたものになったと思います。仲間一人ひとりが心を解き放ち、開放できた日でもあったかな、と思います。仲間が一つの目的に向かって何かを一生懸命にやることや、一つのことに進んでいくことは、自然と仲間の心が集中凝縮されて面白いな、いいな、と思います。こういった行事があることで、いつもとは違う時間を過ごせる事は、とてもいい気分転換になると思います。だから、時折大きな行事や催しがあることは大変有難い事です。これもハイパーパワーの“お導き”なのでしょうか…。



みんなが一致団結すると もの凄くパワーを出せる

潮騒JTCの夏祭りですが、レイクエコーはステージのある会場で人数的にもちょうどいい広さだと感じました。私は1年前にスリップしてしまい、去年の今頃はとても辛く、苦しい自分がいました。でも、私はスリップを転機に自分を変えるプログラムを徹底的に実践してきました。この1年、自分を見つめ直し、欠点を少しずつ取り除く作業をし、同時に正直になるプログラムも始めたので、今はそれがいい方向に向かっているなと実感しています。

それにしても、こういった施設の行事はいつも楽しく、バカになるときは思い切り弾けて、与えられたプログラム、役割は責任を持ってきちっと行動に移す。今はそんなメリハリの利いた自分がいます。今回の出し物も1カ月前から毎朝、みんなで練習をし、話し合い、助け合い、仲間とのコミュニケーションも取れて、本当に素の自分達を潮騒の仲間の皆さんに見ていただけたと思っています。1年前は人前にも出られなかった仲間が、お腹を出して踊っている。素晴らしい成長だな、と思いました。



ダルクの本質はファザーシップ ではなくマザーシップ

——近藤さんが作ったダルクも今では全国に80カ所近くに増えました。個性あるダルクも生まれているようですが…。

近藤 俺自身、今ダルクがいくつあるか正確には知らないんだ。ダルクは組織化を嫌うから、自然に広がって草の根的に増えていく。それでいいんだよ。責任者の個性の数だけ増えていけばいい。それをコントロールしようというのは間違い。創設者の俺も含めてダルクは特定の人物の所有物ではない。選択肢が多ければ多いほど自分に合ったダルクを選べる。

そうはいっても今は情報化の時代だから、個々のダルクの情報格差はできるだけなくしたい。地理的なハンディも考えれば横のネットワークも必要だ。お互いの経験交流もあったほうがいい。各ダルクには一番大事な根っこの部分は押さえておいてほしい、というのが創設者としての俺の願い。そんな考えで日本ダルクでは3年前から新聞を作っている。経費は掛かるが、なんとか年4、5回は発行し続けている。潮騒も広告を出してくれると有難いんだがな(笑)。

——前回、潮騒の名称問題は想定内だとおっしゃいましたが、都民ファーストの小池都知事じゃないですけど、ダルクの原理からすれば内部対立は止揚できると？

近藤 難しいことを言うね。昔サヨクや労組が使った言葉だろう。正・反・合ってやつだな。そう堅苦しく考えなくてもいいんじゃないか。ダルクの本質はファザーシッ

プじゃなくマザーシップにある。対立を包み込む愛、優しさなんだよ。個別の対立なんて、依存症の回復にとっては大した問題じゃない。いつの間にか対立や憎しみとかを優しく包み込んで無力にする、意味のないものになってしまう。そういう霊的な力がダルクにはある。そこがパワーゲームに酔いしれるファザーシップの思想や信条、政治イデオロギーとは180度違うところかな。

ダルクは狭い対立を超えた 仲間としての繋がりが原点

——でも、理想論すぎませんか？当事者は一筋縄ではいかないヤク中、アル中ですよ。屈折の激しい人生を送ってきた訳で、素直に優しさを受け入れる度量のある人間って少数派でしょう。

近藤 そこは時間を掛けてステップの力を信じるしかない。俺がダルクをつくった時の基本は、はっきりしている。こっちが正統で、あっちは異端だから、あっちにはダルクの名前を使わせない、というのはおかしい話だ。ダルク本来のあり方からして、そういう発想にはならない。ダルクという狭い囲い方ではなくて、同じ依存症の回復を目指す仲間を支援する自助的なグループという考えじゃないとダメなんだよ。まあ人間だから、いろいろ複雑な背景や感情的な対立が先に立つことはあるにせよ、ダルクは本来、そうした狭い対立を超えた仲間としての繋がりがだから、そこを押さえとけば済む話だ。

——よく言う「許し」と「癒し」ですね。確かにダルクが消防署みたいな存在なら、ごちゃごちゃモメてるよりも依存症で苦しんでいる仲間の「火消し役」に徹する事の

方が重要。それが本来の役目ですよね。そういうビジョンで、かつての潮騒の名称問題も乗り越えてほしいんですが…。

近藤 うまいことを言うね。そうなんだよ。こっちのダルクは正しくて、あっちのダルクは悪いとかのレッテル張り、その発想や考え方自体が本来的におかしい。確かに問題のあるダルクはあるだろう。評判のよろしくないダルクもある。いろんな噂も俺の耳には届いている。でもそれは、そのダルクの問題。いずれ自然淘汰されるだろう。アドバイスを求められれば、これだけ長くやってる訳だから、何かしら助言できるかもしれないけど、基本は個別の次元で解決できる問題にすぎないと俺は思う。俺がどちらかの味方に付くという発想はあり得ない。ダルクはたくさんあったほうがいい訳だから、俺はユタカに「ごちゃごちゃした問題で頭を悩ますよりも、ここは発想を転換して先を見通した施設の名前に切り替えた方がいいんじゃないか。その方がすっきりする」とね。

そもそも依存症問題は 医者だけでは解決できない

——過去は変えられないけど未来は変えられるという助言ですね。

近藤 大げさに考える必要はない。野球だって直球勝負だけでは身が持たない。投手寿命はすぐダメになる。力任せではなくて、打者のウイークポイントを見極めながら、変化球を織り交ぜて緩急あるピッチングの方が長続きするよな。物事は真正面から攻めるよりも横から攻める事で、ピンチの局面から脱せられる、という経験は誰にもあるだろう。俺は、その事をユタカに話しただけ、先見の明があった訳じゃない。ダルクという名前にこだわらずに「ジョブトレーニングセンターではどうなんだ？」とね。今もそうだが、あの当時だってダルクで一番のウイークポイントは就労支援の構造がないことだった。その分野をユタカが切り開いてくれるんなら、名付け親として俺も応援しがいがある。

——このところ有名人の薬物事件があると、必ずダルクが登場しますね。メディアでも取り上げられるようになって、ダルクの名が一種のブランド力だと錯覚されているんじゃないですか。そういう変な風潮がダルクにないですか？

近藤 あまり関係ないと思うけどな、そんな優れたブランドではないだろう。今だって地方でダルクをつくるとなれば必ず地元で反対されるよ。

——でも、ダルクという名はかなり浸透していると思

ますよ、テレビのワイドショーでもコメンテーターが話題にのせますしね。

近藤 今年(2016年)になって、初めて「近ちゃん、そろそろ老い先もないから一緒にやらないか？」と斎藤学先生から誘いを受けた。彼とは同じ年齢だから、一緒に事務局やらないかと言うんだ。ダルクを30数年やってきたけど、俺には場所を借りたりする力がないから、龍谷大学教授の石塚伸一さん達を巻き込んで独自に学究的な取り組みをやって来た蓄積はあるから、そうしたことが自信になっていることはある。でも医学会は医者集まり、そもそも依存症問題は医者だけでは解決できない。医者の話す話は実際に我々当事者のハートにはなかなか響きにくい。俺達にとっては、あまり役に立つような学会ではないというのが本音なんだ。

医者と司法とダルクの トライアングル関係を築いた

近藤 最近は医者が依存症というのではなく「化学物質の使用障害」という名前に変えたらどうか？」と言うけど、関係ないんだよ。言葉の言い換えで済むんなら、とっくの昔に依存症問題はクリアできている。だから余計なお世話だ、って俺は思うよ。我々は医者ではないんだから、言葉だけで具体的な話になっていないということが、俺達には不満なんだ。学会自体が役に立つもの、地域を反映して、社会の中に入っていく、この国を回復しやすい土壌にしてくれるならいいけど、なんか、あいつが正しいとか、こっちは間違っている、とかコップの中の争いみたいに思えて仕方ない。聞こえてくるのは、そんな話ばかりだから、どうしても学会には足が向かないんだ。

俺はダルクで医者とでコラボしてきたけど、その時も医者だけでは足りないから、医者と司法とダルク。このトライアングル関係を築いた。理想を言えば教育や福祉なんかも絡めばいいんだと思うけど、三者でも結構いい感じでやって来れた。30数年たって、やっと学会でも認められたのかな、という感慨もない訳ではないけどね。若い世代の中には医者を超えるような話もダルクの中でしてるし、みんな自信になったんじゃないかな。今まではサポーターとして支えてもらったけど、支援者ともだんだんと対等になって来たから…。

——その対等というところがポイントですよ。自助グループが出来たのは専門家では治せないという発想からでした。それが年月を経て治療共同体として欧米に根付いた。その根源は当事者活動、当事者主義ですね。すいません。続きは次回をお願いします。(次号に続く)



▲ 潮騒ジョブの施設名が目を引く下津ナイトケア施設と仲間の信頼が厚いヒロシさん

潮騒 JTC の概要を明らかにする 2017 シリーズ企画の 5 回目は鹿嶋市宮津台にある下津ナイトケア施設です。NPO の本部が置かれ、イベント等でも広く利用されています。下津海水浴場に向かう道路からはブルーの建物の外壁正面に「潮騒ジョブトレーニングセンター」の大きな文字が目を引きます。建物屋上からは太平洋（鹿島灘）の水平線が望めます。潮騒の飛躍を象徴する建物と言っていいでしょう。（広報部）

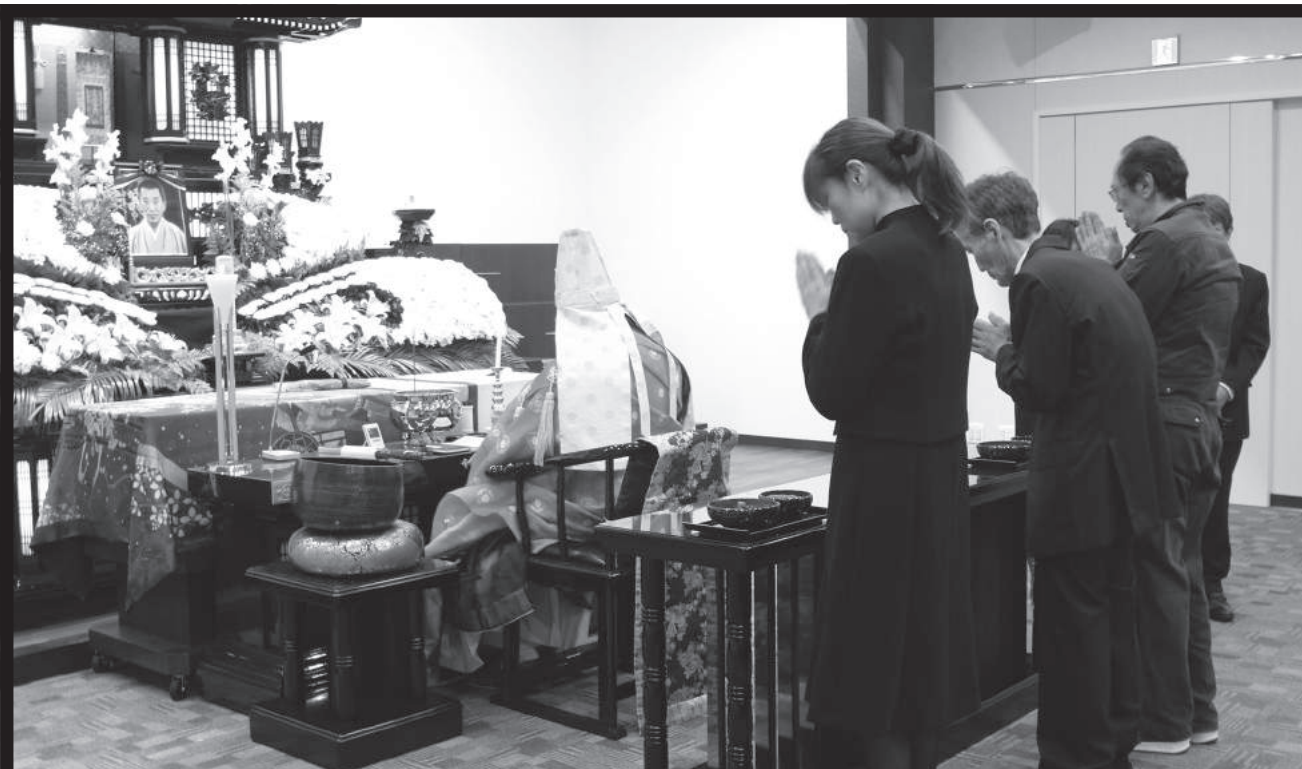
たった 6 人で始まった潮騒 JTC の前身施設が漸く軌道に乗り、少しずつ入寮者が増えると、施設に充てた鹿嶋市役所前のアパートでは手狭になり、運よく入手できた郊外の農村部の元クリニックだった物件に移転しました。しかし、ここも 1 年が過ぎる頃には入寮者の増加に対応できなくなり、思い切って大きめの物件を探すことになりました。そうして約 60 人が入居できる、元民宿だった大型建物を取得できました。これが 2009（平成 21）年 12 月に開所した、下津ナイトケア施設です。鉄筋コンクリート造り 3 階建てと木造 2 階建ての建物で構成されており、道路に面した広い駐車場は夏のバーベキュー大会や暮れの餅つき大会などのイベントに利用されています。現在では潮騒の大半を占めるアルコール依存症の仲間約 55 人が寝泊まりしています。

ここの管理を任されているヒロシさん（69）は、潮騒でも古株の一人です。重度のアルコール依存症に苦しみ、秋元病院を経て潮騒に繋がった時は疲弊著しく、憔悴しきっていたと言います。しかし、その後は着実に回復の道を歩み、栗原センター長や仲間達から厚い信頼を得ています。かつて土木建築会社で働いていたことから大型

免許を持っており、増員に対応して潮騒が購入した中古マイクロバスの運転手も担いました。また当時は専任の看護師がいなかったので、各病院から処方された薬をトラブルなく服用できるように細かく仕分けする任務や、一日分の生活費配分役も担当しました。同施設は厨房も完備していたので、入寮者交代でスーパーに食材を買い出しに行き、自分達で食事を作っていました。

「当初は今のように入寮者が多くなかったのですが、家族的な雰囲気ではみんなが一緒に行動できた。しかし、その後も入寮者が増え続けると、一日中部屋に籠っている仲間が多くなり、日中活動を分離することが求められるようになった」とヒロシさん。そうして市の中心部にデイケア施設（潮騒アディクションビレッジ会館）ができると入寮者の基本プログラムはそちらに移行させて、施設ごとの役割分担が明確になりました。下津施設が一躍世間の注目を集めたのが、3・11 東日本大震災（2011 年）に際して、地元の被災者支援に建物内の入浴施設を無料開放したことです。この時には下津施設メンバーが交代で市の給水ボランティアとしても活躍し、地元で喜ばれました。さらに市の協力で目の前の道路を潮騒フラワーロードとして自主管理、四季折々の花を咲かせて道行くドライバーや近隣住民を和ませています。

その一方、依存症者の多様化や高齢化、重複障害などの困難を反映して、仲間の病院付き添い役なのに医師とのやりとりができないなど、コミュニケーションギャップの新たな課題も浮上しています。口数の少ない下津施設の生き字引・ヒロシさんですが、「同じ依存症だとしても、最近の仲間とは考え方や行動面での違いを意識させられている」と、難しさを語ってくれました。



回復の難しさを体現した仲間 3 人を追悼

～ 一休さん・シブヤさん・ケイさん安らかに ～

高齢化や重複障害で回復の難しさを体現させていた仲間 3 人が 7 月下旬から 8 月初めに掛けて死亡し、鹿嶋市内の葬祭場で営まれた葬儀・告別式には潮騒の仲間達が参列して 3 人を追悼しました。亡くなったのはアノニマスネームが一休（本名・前田光宏）さん＝享年 55 歳＝、シブヤ（同・渋谷宣夫）さん＝享年 77 歳＝、ケイ（同・吉野康男）さん＝享年 66 歳＝です。

このうちシブヤさんは長く任侠道の世界に身を置き、刑務所を出所後に潮騒に繋がりました。重いアルコール依存症を患い、足の骨折や気管支喘息、高血圧などに苦しみました。人情に厚く涙もろい性格で仲間にも慕われ、関連施設の百寿亭でリハビリに励みました。同じくアルコール依存症のケイさんは平成 21 年夏に入寮しましたが、なかなかお酒が止まらず、何度か交通事故にも遭遇しました。長い施設暮らしにあっても仲間への気配りを忘れず、おしゃれにも気を遣う仲間でした。2 人の葬式は、潮騒の施設葬として執り行われました。

一方、潮騒の仲間達の中では数少ない家族葬として営まれた一休さんについては、栗原センター長に深

い思い入れがあります。やはり重度のアルコール依存症で、潮騒を出たり入ったりが続きました。施設では“いじられキャラ”だったように思います。でも、彼にふさわしいアノニマスネームも手伝って、みんなから親しまれる存在でした。最後まで自分を変えることが難しい仲間の一人でしたが、彼もまた反面教師として自らの死を通して命の重さをメッセージしてくれました。

一休さんは入寮した約 8 年前に比べて、次第に精神疾患の方が深刻となり、最後は認知症のように日常の人間関係にも支障をきたす生活でした。コーラや水を大量に飲み、依存物が変化していた印象があります。彼もまた潮騒が「終の棲家」となり、潮騒が必要不可欠な存在でした。栗原センター長は「命は落としたけれど、潮騒に繋がったことで救われた部分も多かったと思う。なんとかアルコール依存症の平均寿命を生きたけれど、迷惑を掛け続けた家族（きょうだい）が葬式を出してくれたのは救い。年長いても家族会に足を運んでくれた彼の亡き母親と、天国で再会していることだろう」と話しました。仲間 3 人の霊よ、安らかに！ 合掌。(潮)

受刑者からの手紙

運動会はなくても“受刑者はお菓子が出れば OK”

栗原センター長、シゲさん、お元気ですか？手紙と共に「潮騒通信・どっこい生きてます」を有難うございます。毎回、楽しみに読ませていただいています。やや旧聞に属しますが、春先に実施した潮騒の大運動会、本当に皆様楽しそうでしたね。来年は、私も潮騒の運動会に参加していると思うと、何だか楽しくなります。ここ「N」の地では、何故か「運動会」がありません。でもお菓子やジュース、弁当は出してくれるので感謝です。まあ、“受刑者は、お菓子が出れば、それでOK”です。（東京都 A・Y）

身体と精神共に3級の障害者で手紙も満足に書けない

私は今また「T」に移送されて居ます。“薬物を止めたい”と云う決心はしています。しかしそれより他にも原因があります。鬱、心因反応、パニック障害、HIVです。この手紙も、満足に書けません。今回は、刑務所内で暴れてしまい、余罪として拘置所にいます。薬も合わずに辛いです。身体と精神共に3級の障害者です。裁判が終われば、また元の「K」か、あるいは「N」辺りに移送になります。宜しくお願い致します。（北海道 M・H）

社会に戻る前の心構えを固めるため今回は色々と書いた

先日、ある本を読んで居て、「面白いな」と思う事が書いてありましたので、ご紹介します。普通の人は「過去は変えられないけれど、未来は変えられる」と、言うのです。でも私は「過去は変えられるけれど、未来は変えられない」と言います。何故かと言うと“今日、不幸な人は明日も不幸なのです。明後日もその次の日も不幸です”何故ならば、そういう人達は“不幸を探すから、です”。

で、“幸せになるためにはどうしたら良いか？”と言うと、自分の過去を振り返って「こんな事、あんな事をしたから不幸になった」を「ああなった、こうしたから、良かった」に変えるのです。「～があったからこそ、今の幸せがあるのだ」と解釈するのです。私の母は仕事で忙しいのと、兄弟が多いために私は母から放ったらかされて育ちました。だから私の姉さんは「母親に放ったらかされて不幸だった」と言っていました。でも私は、「親が構ってくれないから、うるさくなくて良かったな」と思いながら大きくなりました。同じ親を持つ兄妹で、同じ出来事があっても、それぞれ捉え方が違うのですね。だから過去の出来事全てを「～だから良かった」と、変えていけば良いのです。そうすれば過去の出来事がまるでオセロゲームの様に、その全てが幸せな時間に変わっていきます。そしてそれが出来れば、まるでオセロゲームのように全てが幸せな時間へ、と変わっていくのです。そう出来た時には「今日が幸せになって、明日も幸せ」になります。

これは、“納税額12年間ベスト10”という、“日本記録を土地売却や株式公開などはせず、全て「事業所得」によるもの”で成し得た実業家、“斎藤一人さん”という人の本に書いてあった文です。「面白いな」と思い、何度も繰り返し読み返しています。社会にいる時は余り考えない「過去の出来事」を、何故か刑務所の生活の中では、良く思い出したり、色々と考えたりしています。その時に出て来る言葉は確かに“マイナス”の言葉が多く、ため息をつく事が度々あります。

ですが、これからは、その「マイナスをプラスに変えていってみよう！」と、思わされました。それも、“現状を変えていく一つの武器”だろう、と私は思います。先日、委員面接(本面接)がありました。なので社会に戻る前の心構えをもう一度、しっかりとしておこう、と思い、今回は色々と書きました。（長崎県 I・K）

受刑者の皆さんが覚せい剤の単純自己使用で逮捕され、有罪となって罰を受けた時に、社会内でしっかりと治療の場に繋げる措置や仕組みが取られていたならば、刑務所内が覚せい剤の累犯者であふれ返ることはなにかろうな、と手紙を読むたびに悔しい思いを抱きます。根本にある依存症という孤独の病は罰では治せません。底つきと仲間との繋がりが回復のポイントです。

“良い加減”である事が 今の私には大事なこと

いつも送って頂いている「潮騒通信」ですが、心が和みます。センター長の言葉に感動し、仲間の言葉に励まされ、そして笑顔に癒されております。「しらふで生きる事の素晴らしさ」、「世間の常識はDARCの非常識」。これは、所内生活でも同じように感じる事が度々あります。自分が思い描く様に人は動かず、感情の波によって激しくも、身も心も打ち碎かれる事があります。価値観や優先順位等、「皆違って良いのだ」と私は常々思いますが、中々そこまで達する事が難しい私ですが、思い込み過ぎれば爆発してしまうので、“良い加減”である事が今の私には大事なことです。これからの歩みは“逆境を跳ね返すパワー”が必要となります。「生きるを支える」気持ちを大事にしなが、少しずつ“自分を変える”生活”を続けていかなければなりません。今は「全てを失い、自分の問題だと気付いた時」であり、「小さな気づきを、少しずつ積み重ねる」時でもあります。

でも、まだまだ心の中では「仕事をする事で、社会の中で普通に生活していける」と勘違いしている状態です。“回復には仲間との絆が必要不可欠”と認識しながらも、“自分だけ”特別に思う恥ずかしさが情けなく感じます。ひとつの躓きが、次の躓きを生む。掛け違えたボタンは永久に直らない。生きづらい社会地獄の先には薬物依存の世界が広がった。孤独な世界の中は、幻想に酔い、恣意的に虚構を造り上げ、嘘が楽しい。現実を直視する事無く、殻にこもったまま他人を攻撃する。未来の展望も無く、時間を浪費するばかりの私。人としての生業を持たず、犯罪によって生を成す。善悪を考えるよりも、欲を満たす事だけを生き甲斐とした。今もなお、その考えが心に住み着き、回復を妨げている。「断捨離」が出来れば、楽しい人生を歩ける様な気がする。命が一番大切な筈なのに、何故もっと大切にしないのだろう、と私は自分に対してそう思います。

(茨城県 H・N)

苦しみを乗り越えて 毎日を笑顔で送れたらと願う

栗原施設長、お元気でお過ごしでしょうか。シゲさん、毎度のお手紙、有難う御座います。今、私は毎日思っている事があります。塀の中の生活は無駄な時間です。「あの時覚醒剤を打たなければ…」とか「あの時真面目に仕事していたら良かったのに…」とかのタラレバを思い浮かべては後悔しています。シゲさんの手紙の中に書いてありますが、“過去は戻っては来ませんね”。充分に分かっているのですが、塀の中の空間がそうさせているのですね。

同囚の方に「出所したら、また覚醒剤をやるの?」と問い掛けると、「出所したらすぐに手を出す」と言う人とか、「二度とやらない」と言う人の2通りいます。私も以前だったら前者のように「出所したらすぐに手を出す」と答えたいと思います。でも今回は気持ちが上向きで、二度と薬物には手を出さないように回復を目標に固い意識でいます。

今回の懲役では、未決の時からお世話に成っている栗原センター長はじめ、シゲさん達から手紙や「潮騒通信」で励まされています。潮騒通信では、“生の声”が聞けて、同じ目線から見ることが出来たし、「同じ苦しみに悩んでいる人が、この世の中には沢山いるのだな」と思いました。この苦しみを乗り越えて毎日を笑顔で送れたら、二度とこの様な“塀の中”に入る事が無いので、「何々していたら」とか「あれやっていたら」等の“タラレバが無くなる”と、自然に笑顔が出て来て、残りの人生を“有意義に生活出来る”と思うのです。

塀の中の生活は、“反省する事は勿論”ですが、色々な事を想像出来る場所でもあります。今の所、過去や未来、半分半分です。未来については「出所して潮騒ジョブに行つて、仲間とうまく出来るかな?」との不安もありますが、“回復の2文字”を目標にしていますので、どうか宜しくお願いします。

(北海道 N・S)

しおさい、俳壇

8月のお題

お盆

選者 桐本石見

わが俳句人生の歩み・No.43

センター長 栗原 豊

「豊さん。調子はどうですか？ 出所までもう秒読み段階になりましたね。パーラメントを持って迎えに行きます。それで、出てから住む場所なのですが、その日の夜から困ると思うので、藤岡にある施設(注・参照)に一度入ってみたらどうでしょうか？ そこなら三食でくるし、いっぱい仲間もいるので、楽しいと思います。ただ、当然ながらお酒は飲めません。でも、施設にいることは強制ではないので、いつでも自由に出て行くことができます。今、入寮している人で一番年上の方は56歳ぐらいです。これは内緒の話ですが、豊さんの方がその人よりも全然若く見えます。その人も長いこと刑務所に入っていて、出所したその日に一人でその施設に来たそうです。どうですか、一度その施設に行ってみませんか？ 合わなかったら出てきちゃえばいいから。」

それから、どこに住むにしても運転ができたほうが絶対有利なので、免許の更新のために『在監証明』というものをもらってきてください。私も聞いた話なのですが、これは絶対もらってきたほうがいいそうです。免許の他にも使うことがあるそうです。私よりも豊さんのほうが詳しいかな…、なので、在監証明だけは絶対もらってきてください。もう一つ、二日酔い止めのアンブルは持っていくことはできません。豊さんがお酒を飲むこと、クスリをやることに関して、私は手助けはできません。豊さんが出所後どうしようと考えているのか、私にはわかりませんが、どういう道を選んでも、私は豊さんを責めたり、豊さんに失望したりしないと思います。豊さんと私は同じ種類の人間のような気がしているのです。出所まで、あとほんの少しです。がんばってくださいね。」

これを読んだ時、私は太宰治の「富岳百景」という短編小説を思い出した。師匠である井伏鱒二の媒酌で結婚も決まり、精神的にも充実していた中期の名作で、山梨県河口湖町の御坂峠頂上にある天下茶屋に逗留しながら再起を目指し、執筆活動に励んだ時のエピソードを描いた名作である。この中で宿の娘が親身になって太宰の世話をする事に対し、「私は、ありがたい事だと思った。大袈裟な言い方をすれば、これは人間の生き抜く努力に対しての、純粋な声援である。なんの報酬も考へてみない。私は、娘さんを、美しいと思った」と記している。私は姪に対して、これと同じ思いを抱いた。人が生きることに對しての純粋な声援…、でも私は姪の思いを出所してすぐに裏切ってしまった。当時、私の依存症は本当に病根が深かったのである。その事は次回に。(次号に続く)

注) 群馬県藤岡市の山の中にある藤岡ダルクのこと。NPO法人アパリ(アジア太平洋地域アディクション研究所)が運営する、定員40人の入寮型ダルク。裁判中の被告人や、刑務所からの仮釈放者の入寮を積極的に受け入れており、プログラムで取り組むエイサーの実力は高い評価を得ている。

松島の

松の百態

盆の月

あべ

日本三景の一つ松島は、二百六十余島の浮ぶ絶景の湾で俳聖芭蕉も尋ねている。しかし、句は無い。島々は四季に美しいが、初秋の月に島の松影の形も趣があります。「八十島のおぼろや酒も浦霞」が私にもあり、昔尋ねた松島が懐かしい句です。

特選句

親不孝

詫びて涙に

盆の墓

ふじ

自分の意思で生れた訳ではないが、自分の意思で生きてゆくのが人間だと言われる。そして生きて来た今が自分の姿でもあります。盆は死者への供養の日だが、生者の祝でもあります。地球や人類の歴史は億年、個人の生は百年、比べれば寸秒、ならば今を懸命に生きる事かも知れません。

特選句

故郷に

揃ふ顔ぶれ

盆休み

ひろ

時代や産業構造の変化で都会に働く人が多くなり、過疎化の進む現代だがそれでも盆正月には家族縁者が集まり、故郷の盆を楽しみ、また先祖の供養をする。昔は藪入りと言ったが、明治頃から盆休みと夏休みを兼ねて長期休暇を取る様になった。集団就職の頃の帰省や歌謡の「津軽海峡冬景色」などと思う句です。

特選句

今月の秀逸句

盆の月

旦那と母に
逢いたしや

まり

人には今までの生きてきた積み重ねの結果の悲喜交々の人生がある。盆の月を眺めながら年日を顧みて、つくづく主人や母に逢いたいと思う。日本列島が快晴なら月は何処でも見れますが、それを眺める人の思いは様々で、この句もまた胸に沁みます。

迎え盆

提灯持ちて
墓の道

みく

盆には精霊を迎えるのに道が暗いので家の門に迎火を焚いたり、墓まで迎えに行く地方もある。また盆前に墓や山の道を草刈りなどするが、盆路、精霊路とも言い、昔の里では個人で墓場を持ったので手伝いしたのも懐かしい句です。

お盆にも

帰れず姉に
任せきり

まこ

諸々の事情から普段も盆にも帰省出来なくて、里の盆の支度や老父母の世話も姉に頼み任せている。本来なら台所など手伝うのが姉妹の仲でもある。実感の切々した思いの句です。

お盆とて

仮設住宅
帰れない

こば

七年前の大地震では今だ仮設住宅の生活が続く。盆の帰省とて泊まる部屋もままならぬし、気兼ねもある。熊本地震などの現状と思ひ合わせて切実な句です。

今は亡き

母の笑顔や
盆の月

れいこ

月は四季に配しても、また見る所によつても夫々の趣がありますが、盆の月には故郷や故人を偲ぶ想いが強い様に思えます。特別な事情で帰省出来ない人には亡母の笑顔に見えるかも。遠境や苦境に在ればなお更に母や故郷が恋しい切実の句です。

預かりし

遺骨三柱
盆供養

ゆたか

この遺骨は縁者か友人のか知れませんが、まだ墓も無く特別の事情で預かっている。盆になり、自分の家の仏と共に供養をする。私も先祖の遺骨を寺に預けた事がありますが、今は近くの墓に葬った。諸々の事情を想像して哀れを思う句です。

佳作

飲む人は佳き酒選ぶけふの月	ばってん
故郷へ愛さんさんと盆帰り	しげ
子ら育ち夫婦だけなる盆休み	みく
祖父のこと思ひながらの盆の墓	めい
水面にも彩る利根の花火かな	くま
亡き人に逢える思いの盆の月	ゆうこ
ゆっくりと一人の日々や盆休み	かよこ
お盆には親族迎えに山へ行く	いるか
盆休み線香上げに里の墓	ゆめ
盆休み子らの待ちたる赤とんぼ	あきら

お盆には逢えると願ひ母の霊	しま
赤とんぼ連れて故郷の墓参り	ちやこ
お盆とて行くに行けなきもどかしさ	こば
親戚の顔を合わせる盆の夜	ひろ
薪を割る音に目覚めし盆休み	ひろ
盆休みなにはさておき墓掃除	かこ
年重ねお墓参りも厳しける	かこ
盆休み母愛しさに香を焚く	けいり
鎮魂の水のたぎりや敗戦忌	ゆたか

どっかい

私も生きてます～我が回復記～「ブーちゃんの回復記」

第9回

もつ焼き屋を経営し結婚もする順調な歩みだったが…

僕には、お酒を介していろんな人との出会いがあり、その時々で自分がとても助けられました。お酒は人と人とのコミュニケーションを円滑にするツールです。何しろ本音で自分をさらけ出すことができるのですから、その人に飲酒をコントロールできる正常な資質が備わっていれば、自分をステップアップさせる有効な武器となります。なので、もし僕に依存症に繋がる問題飲酒のマイナス要因がなければ、平凡ながらも人生の成功者となっていたかもしれません。

ミレニアム(千年紀)に沸いた2000年(平成12年)、僕は節目の30歳になっていました。たまたま神田の居酒屋で飲んでいる時に、近くの鍛冶町でもつ焼き屋を経営している親方と出会い、意気投合します。後に僕は、そのお店を経営する(ご多分に漏れずアルコール問題で破綻しますが…)ようになるのですから、今考えると人生の大きな分岐点だったのかもしれません。その店は20年以上続いて地盤看板があり、テレビの取材も多い人気店でした。再起を目指していた僕は、このもつ焼き屋で働くようになりました。一生懸命に働き、次第に自分で店を経営してみたいという意識が芽生えていきました。

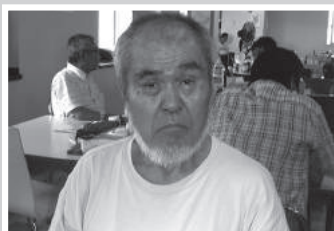
そうした中、僕は縁あって2年後の2002年にお客さんだった女性と結婚します。式は挙げませんでした。親方が媒酌人となってくれました。それほど僕は親方に信頼されていたのです。でも、アディクトの悲しさでプライベートでは気が緩んで失敗もありました。なんと最初のデートでブラックアウトしたのに、嫁は寛容な心で僕を受け入れ、籍を入れてくれたのです。彼女は、最初から僕のお酒のだらしなさを目にしていながら、「この人は(酒さえ)飲まなければ、しっかり仕事ができる人なんだ」という、アルコール依存症の夫を支えるACタイプの妻でした。僕はさらに仕事に励み、休むことなく努力しました。親方は異なる客層を顧客に、三店舗を都内で営むやり手でした。僕は仕事ぶりが評価されて1年後にはなんと店長として本店を任せられ、そして2005年には自分で会社を設立し、経営権の譲渡を受けるまでになりました。この頃は気力も充実していて、いくら飲んでも仕事は休むことなく、うまくいってました。

僕は飲んで仕事に行かないという事はなかったのですが、嫁には「この人は飲ませ過ぎなければ大丈夫…」という“許し”がありました。しかし、それもほころびが出てきます。嫁に知られないように、ちょこちょこ隠れ酒をして店の経営にも悪影響が出てきたのです。嫁の我慢も次第に臨界点に向かい、そのうちに「次飲んだら、これに判を押して」と目の前に離婚届を出される場面が5回ぐらい続き、ついに嫁の堪忍袋の緒が切れて離婚を決意させる事件が起きました。

(次号に続く)

8月のバースデー

もと



潮騒万歳!

ゴメス



かまどで頑張ってます!!

ようへい



感謝しています。

せいじ



今日一日

から



事情があって…

よこ

just for today &
one more day!!

8月の行事予定

- 8月13・19日 秋元病院メッセージ
- 8月10日 潮騒俳句会
- 8月18日 潮騒夏祭り「入寮者交流会」
- 8月21日 ひたちなか市民生委員研修来訪
- 8月26日 第8回リカバリーパレード実行委員会
- 8月27日 潮騒家族会

9月の行事予定

- 9月10・16日 秋元病院メッセージ
- 9月7日 潮騒俳句会
- 9月14日 ひたちなか市中地区
福祉団体研修来訪
- 9月16・17日 JA しおさい鹿島農産物直売所新米祭り
- 9月24日 潮騒家族会

献金・献品を頂いた方(8月15日現在)

- ・坂西 ミヤ 様 ・K&G 企画 様 ・狩野 様
- ・坂西 学 様 ・山本 様 ・市毛 様
- ・幸友住宅 様 ・内堀 様 ・富井 建夫 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。
本当にありがとうございました。

おかげさまで潮騒JTCは、回復のためのプログラムを
実践することができておりますことをご報告いたします。

今後ともご支援くださいますよう、
なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありが
うございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させてい
ただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

僕は潮騒通信の編集作業を任されているにすぎない立場だが、時折、「潮騒はどこに向かっているのだろう」と不安になる事がある。「神の命じるままに、ハイパーパワーの計画に沿って施設の規模を拡大しているのだ」と自分なりに納得しながらも、生来の心配性からアクセルとブレーキの適度な使い分けを求めている。「既存の社会制度から締め出され、あるいはこの社会に適応できない人々の受け皿や終の棲家となるのだ」との高い志はよし、けれど所詮は人間がやる事だけに自分達の力量や限度を超えた取り組みは無謀との誹りは免れない。何か決定的な事件が起きたらどうなるのだろう…、施設への定着率が悪くなっていないか…、スタッフに過重な負担が掛かりすぎていないか…、NPOの枠を超えていないか…等々、小心者の僕は余計な心配をしてしまう。私見だけれど、潮騒の源流であるダルクには世間の常識の枠では計れない、草の根の社会変革運動の側面を感じ取ってきた。そもそも主役である当事者が破天荒なエネルギーに満ち溢れているから、「ダルクの常識は世間の非常識」となる。歴史が教える社会変革といえばイデオロギーや宗教、政治運動などを想起させるが、ダルクのそれは徒党を嫌い、パワーゲームを否定し続ける受動的で謙虚な靈力に支えられている。ガンジーの非暴力やマザーテレサの博愛、身近で言えば夭折した詩人、金子みすゞの世界観に近いかもしれない。買い被りだとしても、ダルクや潮騒は時代の閉塞を超えるビジョンを秘めている、と僕は勝手に考えている。だから既存の言葉で捉えるのは困難だ。世間の常識を超える、この名づけようもない社会変革運動を、僕は無理やり世間の常識の言葉にはめ込もうとしているのかもしれない。もとより自己矛盾は百も承知。時には、ほころびが出るのも当たり前と開き直りたい。だって、どこもやっていない取り組みなのだから…。(市)

潮騒通信 どっこい生きてます! 2017年8号

Contents

- P② 「情けは人の為ならず」を本来の趣旨で実践
- P③ ロイ・アッセンハイマー神父の納骨式に寄せて
- P④ 潮騒夏祭り
- P⑥ 近藤恒夫インタビュー 第2回
「俺がどちらかの味方に付くという発想はあり得ない」
- P⑧ 2017 シリーズ企画「潮騒ジョブってどんな施設なの?」
その5:「下津ナイトケア施設」
- P⑨ 回復の難しさを体現した仲間3人を追悼
- P⑩ 受刑者からの手紙
- P⑫ しおさい俳壇 8月のお題「お盆」
- P⑭ どっこい私も生きてます「ブーちゃんの回復記」第9回／8月のバースデー
- P⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次

■ 編集・発行:

特定非営利活動法人
潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒リカバリーホーム(中施設)
〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 56号
〒311-2213 茨城県鹿嶋市中 2773-16
TEL:0299-69-9099 FAX:0299-69-9098

潮騒スリークオーターハウス鉾田
〒311-2113 茨城県鉾田市上幡木 1113-39

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>



